

---

# 配偶者は誰？

-シンジ-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

配偶者は誰？

### 【著者名】

IZUMI

### 【作者名】

シンジ

-

### 【あらすじ】

入学者の中にいる“配偶者”。そいつを見つければ願い事を叶えてもらえるが、間違えれば退学。毎月出されるヒントで、見つけることが出来るか…。

「よしー。」

俺は相沢一郎、今日から高校生になる。

緊張をしていたので、気合を入れて入学式の会場である体育館に入った。

「同じクラスだな！」

やつと見つけた自分の席に座った時、後ろから声をかけられた。

「真志か、また同じクラスメイトとこじりよろしくな」

そこに立っていたのは、中学の時もクラスメイトの遠藤真志だった。

「お前…、なんか気持ち悪いぞ。わざわざわざうつこいつのを囁うのはな

「うぬぬこー。」

「そういえば、高校に入つてもサッカー続けるんだっけ？」

「ああ、お前は高校に入つても部活やらないんだろ」

「分かってるじゃん。でも、バイトは探そつかなあ」

「こやこや、禁止されますから」

「眞面目くん、だから君はあまりのだよ。アルバイトをやつたって  
そつそくばれるもんじゃないつしょ」

君の方が考えが甘いよつた氣もするんだけど。

町内の高校だから、アルバイト先も近くなると思つんだよな。

「勝手にじる」

「ははは、冷たいねえ。取りあえず、もつもつと様子を見てから  
考えるけどね」

「入学式始まる前から校則を破つたとするなよな……」

「なんか言つた?」

「そろそろ座つた方がいいぞ」

「それもそうだな」

しばらくすると入学式が始まった。

「相沢君知つてる?」

教室に向かっている時、後ろの人かいきなり話しかけてきた。

「えっと…」

「」の人は誰だろ？。

クラスメイトだらうけど、何で俺の名前を知っているんだ？

「朝倉加奈よ。入学式で全員名前呼ばれたじゃない。その時に覚えておいたの」

心が読まれているかのように、聞く前に疑問に思つたことに答えてくれた。

「なるほど、よろしく。それで知つてるつて何のこと？」

平常心ではいるけど、入学早々に女子に話しかけられてちょっとびりうれしかつたりする。

「去年から」この校長が変わつたらしんだけど、その校長が面白いことをやってるらしいよ」

当然、入学式で校長の挨拶があつたので顔を思い出す。

定年過ぎてるんじゃないかつて位の歳のおじいさんだつた気がする。

「面白」こと？

「そう、入学者の中に一人だけ入学金とか授業料が免除になついる人がいるの」

なんだそれ。

「意味が分からん」

「話はここからよ。その人を見つけた人は同じ待遇を受けて、願い事を一つ叶えてくれるらしいわ」

そりやすごいけど…。

「そいつは見つかっても何もないのかよ」

「そりやあるわよ。去年と同じなら、選ばれた人は入学式前に校長に呼ばれてルールを説明されるらしいわ。ペナルティは単純に退学ともう一つあるらしいけど、それは選ばれなきゃ分からぬわ」

信憑性は薄いけど、確かに本当なら面白いな。

入学式前に呼ばれた奴…か。

「“配偶者”って、選ばれた人を呼んでくるらしいわ」

「でも、どうやって見つけるんだよ」

入学したのは320人ぐらいいるはずだ。

「毎月ヒントが出されるらしいわよ。聞いた話だと、はじめのヒントは今田」

「そりや楽しみだ」

噂を真に受けるタイプなのかな。

そう思つてみると、いつの間にか教室の前だつた。

「今日はそれだけだな。なんだこれ……？」

担任の橋口長治先生は連絡を終えたと思ったところであるプリントに目をとめた。

「報告しろって書いてあるんだが内容が分からん……、一応書うな」

そういうと、橋口先生をナントを読み始めた。

「えーと、『配偶者』はA組の中にあるって書いてあるだけだな…。今日は以上だ」

配偶者はA組の中に……。

「ほりね。あと、言い忘れてたけど間違えたら医学、ひしこから、チヤンスは一回よ

後ろから声を聞きながら思つ。

面白そうだ。

俺も含めて40人の中にはいるってことか。

## 01・相沢一郎（後書き）

初めて書きました。  
設定はあります、ちやつかり「メーティー」にしようかなって思つて  
います。

「メーティー」が好きだからとかじやないですよー多分ー。  
当分は…、とこつかんまつ「メーティー」にするのは難しいかも知  
れませんけど。

続き頑張つて行ひつと思します^ ^

「うへん…」

あの話は本当だと思ひ…。

でも、入学式から一週間経つのに全然分からぬ…！」

知らなかつたように見えた相沢君だって、まだ確實に白といつ詰じやない。

それ以前に、クラスメイトのことを良く知らない以上、断定はまだまだ難しいのはしょうがないんだけど…。

「加奈ちゃんどうしたの？」

「まあか、なんでもないよ」

栗原真央、優しくておとなしい性格の子で、自然と話すよつこなつた。

「もしかして、また“配偶者”的こと？ そんなに叶えたい」とでもあるの？」

人には言えないけど、確かにある。

去年の人の有り得ない願い事が叶つたんだから、私の願い事も叶はずつて思つてる。

それも、聞いた話になっちゃつんだけビ。

「そんなことを聞くまおは願い事はないの？」

「そりやあ…、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれるとか」

「教室まで馬が入り込んだら大騒ぎね」

「アイドルになるとか」

「保育士になりたいって言つてなかつた？」

「友達百人できるとか」

「案外いけるわよ？」

「あとはねえ…」

「いや、もういいわよ…」

本当にかなえてほしいとか思つてないでしょ。

「わうだよねえ、授業に遅刻しちゃうもんねえ」

真央がそういう終ると同時にチャイムが鳴つた。

「移動教室だつたわよね」

「教室にいるのは私たちだけだよね」

香氣にじゅべつてゐる場合じやなこじやない。

「お腹ペペリペリだよー。」

「うわこわよー一緒に食べないわよー。」

今はお昼休み。

「そんなこと言ひやだめだよお。志保りやん、一緒に食べようつね

私と真央、板垣志保の三人で机を借りてお弁当を広げ始めていた。

「まおちやんは優しいわー！ 惣れ直しちやつたー！」

「正直、こつもの」ととほこえ、ひよひよへくへくわ。

「気持ち悪いこと言ひてんじやないこの」

「可愛いんだからしようがないだろ！」

「女の子にそんなこと言われてもうれしくないよお

「顔を赤くしながらいう真央。

変な関係に発展しなきやこいんだけど…。

「やつこえば、橋口先生つて今年入つたばかりだろ？」

「やつね、だから配偶者のことを知らないでも当たり前ね」

「またその話するのやつ？」

真央は「」の話にあまり興味が無いのかも知れない。

「当たり前だろー。私はまおちやんと一生を共に過ぐせるやつ」と  
いつ願いがあるのだ！」

「冗談だよねえ？」

「素で言つてたら友達という枠から私は抜けるわ」

「まおちやん、そんな田で私を見ないでーー。加奈は必ずもっこ  
けど」

「なんですよー？」

「いやだつて…、魅力が感じられないし…」

「女として、それは聞き捨てならないわよー？」

「やつだよお、見た目は綺麗なんだから」

「引っかかる言い方な気がするのは『』のせいかもしれへー」

「落ち着けよー！ 弁当食べちゃまつれー。」

やつ言つながら、私のお弁当に手を伸ばす志保。

「私もお腹が空こるのは同じなんだから、そんなことは許さないわよ！」

「あはは、本当に食つたりしないって」

「どうなんだか」

「やういえば、配偶者を見つかるひとわざ」

「さなり、真央が話題を戻した

あまり興味のない話題だと思つたんだけ…。

「誰だか全然分からねえけどなあ」

「見つけるって事は、…その子を犠牲にするつてことだよね」

「……」

確かにやうかもしれないけど、ただのクラスメイトよりも私は願い事を選ぼうと思つてゐる。

血口心的なかもしれないけど…。

だから、私はとても冷ややかな目を今しているかもしれない。

「… そうなるのか。でもよ、ただのクラスメイトよりも叶えたい夢を取る奴の方が多いと思つぜ？」

「それが私でも…？」

その言葉に、私の考えが揺らいだ。

「なんてねえ」

「ちょつ！ いきなりキャラ戻つたわね！」

た。一瞬で真央の普耳の雰囲気は戻って少し遅れて和は言葉を発し

驚かしやがて！ お茶田ちゃんじやねえか！」

「あなたの目には、まおちゃんがプラスにしか映つてないの！？」

「やういえはあるが、配偶者も1年間はわながてたら願い事を叶えてもうらえむらしこう」

そういうは、先輩から聞いたとき、そんなことも言っていた気がする。

私は探す方だつて分かつてたから忘れてたけど。

「私達には関係ないけどね」

「だな」

「やつだよねえ」

関係ないとは言つたけど…、本当にそうなのかなしら?

## 02・朝倉 加奈（後書き）

視点を「一話」とに変えていきます。

一応、主人公的な人物を定めようとは思っています。  
誰なのか簡単に分かつちゃつたらごめんなさいへへ

「いい天気だなあ……」

入学して約半月が過ぎました。

友達が出来るか不安だった舞歌にも、クラスに馴染めてきています。

「本当にいい天気だな」

今にも寝そうな舞歌の呟きを聞いていた人が居たみたいです。

「やうだよねえ、ずっとこの席がいいなあ……。遠藤くんはどう思つ?

「俺は窓側よりも、早く食堂にいる廊下側になりたいわ……」

「お弁当持つてくればどうかなあ……、このぽかぽかのは捨てがたいと思つよ……」

「確かにそうかもな。俺、今にも寝ちゃうやつだし……」

「私もお……」

「でも弁当作るの面倒だし、食堂の料理は全部つまこし……。うーん……」

「次の授業つて何だつける……」

「2時間目だから……。何か忘れたけど教室だったのは覚えてるから、寝ても大丈夫だろ……」

「そっかあ……」

その言つてから1分も経たないうちには、一人の小さな寝息が教室に聞こえることになつた。

チャイムの音が聞こえて夢の世界から脱出です。

夢の中でも、雲の上で寝てたような気がするなあ……。

「起きる、私の席だぞ！」

後ろから志保ちゃんの声が聞こえるから、遠藤くんはまだ起きてないみたいですね。

「おわつー!? 机を引くなーー！」

舞歌の椅子にも軽く机らしきものが当たる。

横に引いたのかな。いつものことだから、あまり気にしなくていいよね。

「早く自分の席に戻れよー チャイム鳴つてるから、いつ先生が来ておかしくないんだぞ?」

「机を返せ。一番前の席は寝れないから嫌でござる」

「まだ夢の中か、お前は？」

「バカか？ そんなわけないじゃん」

「死ね

そのあとの遠藤くんの悲鳴と、先生の扉の開く音が重なった。

先生もこつもの」とと細つて、気にしてないみたいですね。

「左利きだったの？」

「せうだけど、今更気付いたのね」

お昼休み、森本恵ちゃんと一緒に食事中です。

「今更でいいやるー

「何言つてるの？」

変なものを見る目で見られてしまった。

「遠藤くんの真似してみただけだよ」

「真志か…、あこつて誰とも仲良くなる気はない？」

お前で呼んでるのは、恵ちゃんも仲がいいのかな。

「恵ちゃんの方が怪しいよお」

「……なんで？」

「頭が良くて人間かどうか怪しいで」ヤギの「

なんかはおうやうで「」やねー

配偶者の説も、ついでには、

ホケたのにスルーは寂しいです。

「うーん、どうなんだろ?」ねえ

そんごく懲りやんせにと懲らしたよなあ

# もぢん 配偶者の話です

あまい興味なしんたにどね

「だって、友達が多いってことは、それだけ情報を手に入れやすいってことじゃない

「捗す側の方が、情報は必要だと思つよお」

「ヒントが少ないから、まだ直感的に思つただけなんだよね」

「逆にや…、誰とも話さないような人の方が怪しいんじやない?」

そういうながら、舞歌達のクラスにだけ配られたクラス名簿のよ

うなプリントを取り出した。

「確かに、自分の情報は極力もらしたくないか…。」これからヒントが出されてくるんだもんね

「やつこつとお…。男の子だったらこの子、女の子だったらこの子とかかな」

言ひながら、名前を指差していく。

クールで見た目もカッコいい『黒川泰明』くんと、綺麗だけど冷たい田をしている『吉井絹子』ちゃんだ。

どちらもクラスに馴染めていないよう見えるんだよねえ。

「うへん…、まだまだ分からなーいわね」

「推測するより観察することの方が今はいいかもねえ…。例えば、誰が仲がいいかとかね」

「あんた…、本当はやる気満々なんじゃない?」

そのつもりは無いんだけどなあ…、遠藤くんが疑われたのはうれしくなかつたけどねえ。

言わないけど。

「そんなことないよ…。それより、食べ終わったらまた寝ようかなあ…」

夢の続きをが見たいなあ……、進展していく夢じやないけどねえ……。

「次は移動教室だけじね」

「やつかあ……、お休み……」

「関係無にして寝るのね、二つの間にか食べ終わってんし。私は

恵みちゃんの瓶を途中から遮断して、夢の世界に落ちてこつた。

楽しげ夢になつまよつて思つながら……。

### 03・阿部 舞歌（後書き）

ちょっとコメटィーっぽくしたつもつですが……どうでしょ？

なにかあったらメッセー‌ジお願いします^ ^

「毎日邪魔だよー。」

教室に来て最初にやることは、朝っぱらから寝ている真志を私の席から引きはがすこと。

「毎日暴力で解決しようとするなよー。」

人の席に座つておいて、鞄で殴つたことが気にくわないよつだ。

「ちょっとー、俺が悪かった！だから、椅子を下ろせーーー。」

今日の私はそれだけじゃ済まなかつた。

「口で言つて分からぬのが悪いんだよー。」

「いやいやいや、そこまで怒ることなくないーー？ 隣の義人くん、椅子取られて困つてるじゃんーーー。」

そこまでと言われても、私が機嫌の悪い時もふざけたことをしているのがいけない。

「ひぬせーーー。」

妹のことで、私は心底機嫌が悪かつたのだ。

ガンツ

私はその瞬間、感情的に怒りをぶつけてしまった。

「殺す気か！？　俺が悪かつたけど、先ずは頭冷やせよ……」

「冗談だと思っていたクラスメートの動きが止まつたように見えた。

「聞いてるのか！？」

そして、私の思考は平常に戻つた。

「……」めん

真志が普段通り騒いでいたおかげで、クラスメートはすぐに自分達の会話に戻つた。

でも、結構本気で私が振り落とした椅子を蹴り返して平氣なはずがない…と思つ。

「お前が素直に謝ると気持ち悪いな

なのに、真志は笑つた…。

「…バカ」

その時、教室の扉が開いた。

「遅れてすまんな、席に着きなさい」

いつの間にかチャイムは鳴つていたようだ。

「なんで校長なの？」

みんなの気持ちを代弁するように眞志は言った。

「お前等の新米教師が風邪を引きおひたからじや。話すこともあるつたから、ちょうどよかつたがな」

そういうえば、校長が配偶者の奴を考えたつてバスケ部の先輩が言つてたつけ。

だとすると、あの話は本当だつたのかな。

「皆知つていて思つうが、わしの考えたゲームの説明をする……」

そう言つと、校長は何か企んでいるような怪しい笑顔を作つた。

「先に言つとくと、先輩達から話を聞いている奴もいるかもしけんが全てが同じなわけじやないからな」

ほとんどの人がちゃんと校長の話を聞いている中で、一人だけ話を聞いていないように見える人がいた。

「まず、最初のヒントとして『“配偶者”はA組の中にいる』と、新米教師が忘れていなけりや伝わつとのはずじや」

頭の後ろで手を組んで一番後ろの席で寝ているのは確か、山下雅史。

喧嘩がめちゃくちゃ強いらしげ、結構ノリのいい人だ。

私は話安かつたりする。

「そして、1年A組にしか参加資格がないことにした。去年は退学者が内定が決まつとつた3年の中からも出てしまつたからなあ」

もう一人は読書に勤しんでいる、野崎泰明。

「この人は、静かで自分から他人と関わろうとしないから私とは性格が合わなそう。」

つて、私との相性なんて興味ないか。

「まず、このクラスにいる“配偶者”を見つけられた者には金銭面での免除とわしの力でどんな願い事も叶えてやる」

校長先生が軽はずみな発言が出来るはずが無いと思つから……やはり、なんでも願いが叶う……？」

「だが、一人一回だけしか選択権はないぞ。間違えたら即退学、他にもペナルティがあるが、それは間違えたらのお楽しみじや。当てたら、配偶者の方が退学じやがな」

そういうえば、私も周りを気にしてちゃんと話を聞いていないうちの一人かもしねない。

正直、願いは自分で叶えるものだと思つてゐるから。

「まあ、すでに選んでいる奴があるが、ふざけ半分であつたし、女子だったので免除にしといたぞ。心当たりのある奴で、本当にそう思つのなら、本人に言つてみるとじや」

……心当たりがあります。

男子バスケ部の米倉生吾に言つた気がする。

「どうか、どこで聞いてたのよー?」

「長くなつてもしょうがないからの、一回ほど早いが次のヒントを言つとくぞ」

私の心の叫びは届かなかつたようだ。

「“配偶者”は学校を休まない、じゃ」

ヒントにならないわね…。

今この所のクラスの出席率100%だもの。

「以上じゃ、本格的なゲームの始まりじゃぞ」

そういうと、校長は笑いながら教室を出て行つた。

変な人だな、略して変人だな。

「良いこと思いついたんだけど、聞いてくれる?」

今は楽しい昼休み、そしてランチタイムだ!

毎日のように、真央と加奈との二人と一緒に食べている。

「配偶者の話で？」

加奈がそう言つたのは、今の話の流れからだ。「

「やうだよお

「どんなことでも、命じてください。」

真央のためだつたら、どんなことでも命がけで試して見せます。

「志保、意味が分からないうちからしゃべらないで

「まあまあ、それでねえ……、配偶者を演じるついでにこのまどうかな

？」

「え？」

珍しく、私と加奈の声が重なつた。

演じるついでに」と。

「配偶者を演じてる自分が、配偶者じゃないって分かるよねえ？」

「ええ、やうね

「うそうそ

「でも、他の人は分からない。それこよつて、もし間違えてくれればライバルは減つて、間違えた人は配偶者じゃなくなるから、私達は見つけやすくなるって思わない？」

真央のその発言に、なんだか違和感を覚えた。

真央は、配偶者を見つけたらその子を犠牲にすることになるって感じのことを言つていたことがあったからかもしれない。

「確かに、それはいいかもしないわね」

「よし、早速やつてみるか！」

「早速？」

私の発言に、今度は真央が声を上げた。

「まあ見てなさいな」

「バカが変な」とするんじゃないわよ?」

「誰がバカだつて?」

「まあまあ、そんな喧嘩ばつかしても良くないよお

真央の声に、加奈が言い返してこなかつたので、私は取りあえず立ち上がつた。

「私が配偶者よ……」

いきなり大声を上げたことにより、クラスメイトの目線が私に集中した。

「うぬやー..」

「うん、私も流石に大きすぎたと思つてゐるよ。

「志保ちゃん、取りあえず座りつかあ」

真央に言われたので、真央に椅子に座りなおす。

「あんた、やつぱりバカでしょ」

「うぬやー..」

みんなだつて、少しほ迷つたりするかもしれないじゃん..

「もしも、みんなが配偶者の真似をしてやつたりあ、じつなど思  
ひ..」

え~と..。

「みんな配偶者に見えてる..かな?」

「やしたら、見つけづらくなるだけでしょ。もつ、今の作戦は逆効  
果になつちやつたかもねえ」

「うこひ」とだ?

「頭傾げてゐんじやないわよ。私達が思つたことが、あなたの  
行動によつてみんなも考えつたかもしれないってことよ」

「なるほどー..」

「あはは。まあ大丈夫だと思つけど、それより早く食べちゃおつ  
よお」

気がつくと、お弁当を広げている人は私達だけで、みんなはしゃ  
いでいた。

「志保、一緒に行くか?」

帰りのHRが終わった頃、これもまた毎日のように志保の呼ぶ声  
がした。

「うん、ちょい待つて」

鞄を持つて志保の隣まで行くと、田中涼もいた。

「はい、お待たせ!」

A組でバスケ部に所属しているのは、私を含めてこの三人。

バスケ仲間といふことで、それなりに仲が良かつたりする。

「志保、ちょい待つて!」

三人で歩き始めようとした時、真志の呼ぶ声が聞こえた。

「どうしたんだあー?」

「涼、お前を呼んだつもりはない。気持ち悪い声を出すな…」

「言われたな…、俺らは先行つてようぜ」

そういうと、圭吾は涼を引きずつて体育館の方へ向かつていった。

「それで…なに?」

朝のことがあつて、なんか気まずい。

「様子おかしかったし、大丈夫かなつて…ね」

「あんたの方が大丈夫なの? その…、手加減した覚えないし」

「ああ、俺の足か?」

「……」

「大丈夫だつて、骨にひびが入つてるかもしけないけどな」

そういうて、真志はなぜか笑つた。

「それは大丈夫つて言わないでしょ!」

「いやいや、俺の大丈夫の定義はいくら糖尿病でも人生楽しんでりや、大丈夫なのさ!」

「なんで、糖尿病?」

「意味分からないわよ!」

「声でかいぞ。取りあえず、俺よりもお前の方が大丈夫に見えないって言つてるのよ」

本当に意味が分からない。

私は真志を傷つけた本人なのに、なんで心配されてるの？

「妹がね…」

なぜか、私は悩んでいることを話始めようとしていた。

「妹つて、違う高校に行つた双子か」

なんでも知つてゐるんだろうと思つたけど、気にせず話続けることにした。

「そう。その妹が部活で苛めにあつて、大好きだつたバスケ止めちゃつたのよー」

私はバスケが大好き…、妹の美保も私に負けないくらいバスケが大好きだつたのに…。

「私は美保が部活を止めるまで、苛められてたことに気が付いて上げられなかつたの！毎日あつてるのに気が付いて上げられなくて、何もして上げられなかつた自分にどうしようもなくイライラしてたのよー」

自分に對してのどうしようもない怒りを真志にぶつけても意味が無いことは分かってる。

分かつてるけど、このじつよつもない怒りを止めることができない。

「何でも話し合える双子だと想つてたのに、なんでも分かり合える姉妹だと想つてたのに…」

そして、美保に頼つてもうえなかつたことが悲しかつた。

私と美保との間に、小さな壁でもあつたのかつて不安になつたのかもしけない。

「俺には志保の気持ちも、その美保つて子の気持ちも分からぬいけど…」

ずっと、聞いていた真志が急に話し始めた。

「悪いのは苛めた奴でお前じゃないし、美保が志保に話なかつたのも心配かけたくないって思つたからかもしれない…。お前も自分でどうにかしようつてする性格だろ?」

「やううだけど…。」

「そうなら、美保の気持ちも分かつてやれよ。苛めだつたら、まだ解決していなかもしけないだろ」

「分かつてるわよー。」

「だから…。少し落ち着いて考えりつてのー。お前さ、冷静さが欠けてちゃなんもしてやれないぞ」

「で、でも、私に何が出来るのよー。」

そこで真志の答えが詰まつたことになりて、一瞬静かになつた。

周りが私達のことを見ていろ」と気付く、やつてれば、大きな声を上げてしまつていた気がする。

「分からねえよ…」

周りに氣を取られてくる時、真志が呟くように声を発した。

「分からないくせに怒鳴るんじやないわよ…」

今の中で、少し冷静さを取り戻せた。

「でもよ、何も出来ないのにイライラしてたつてしょうがないだろ」

「やうひかもしれないけど…」

「俺に出来ることがあつたらなんでも協力するし、お前がそうなつてほしくなくて美保は話さなかつたんじやないか？」

確かに、学校でも意識しなきや平常心でいられない感じだつたけど。

「…まあ、ありがと。やうひ部活に行かなきや

真志の言つてることが正しこのかどうなのか、私はバカだし分からなー。」

「あ、ああ…、引き止めて悪かつたな」

それでも、少しは参考にする」といひよつ。

「それにしても、たまに優しいと気持ち悪いわね」

「だまつとけ！」

取りあえず、話したら少しすつきりしたから、それだけでもよし  
とじよつ。

てこうか、真志の「これはお節介過ぎるわね。

人によつては引くわ。

人によつては…だけどね。

## 04・板垣 志保（後書き）

書き始めてから思ったのですが、登場人物が最低40人って多すぎですよね…＾＾；

頑張つて行きますけどね！！

それにしても、一人の視点で書くのは一話だけって感じで進めているので、書きたいことが多すぎて今回は長くなつてしましました＾＾；

途中で読み飽きしあつた教えてください。

次から気をつけようと思ひます！

話は変わりますが、最近席替えがありました。

席替えの理由が、隣同士だつた級長と副級長が別れたからです。

「やはり、今年の入学者は楽しませてくれそうじゃ」

やつひとつと、校長は笑い始めた。

「ど、言こますと?」

「頭の切れる奴が多いこと言つてじじゃ、だが、“配偶者”に選んだ奴も馬鹿じやない」

「はあ……」

校長は楽しんでいのよつだが、担任としては迷惑な話だ。

「のじとて、問題が発生した場合は全て校長が対応するとは聞いている。

現に、親御さんからの電話をしてくるのを何回も見ているが、こんなばかげたことはやめてほしこものだ。

「これからが楽しみじゃ。まあ、変な奴も多いがな」

初めて担任についた以上、普通のクラスを持ちたかったなあ。

「こやい、出陣じやーー。」

私は今から、恋愛という青春に欠かせないものを手に入れるため、C組というの戦場に同志を連れて戦いに行くのだつ！！

「行つてらつしゃーい」

「待てえいつ！…」

「なんだよおー、早く一人で行つてくればいいじゃん。可愛い子がいたんでしょ」

「だから、同志と共に行かなければ勝てる見込みがないのだよ！…」

「なんの話だよおー、早く一人で行つて来いよ」

香取義人め、俺がモテないことを知つて言つているんじゃないだろうな。

「お前が行くことは決定だ。まだまだ、同志が足りんぞ！…」

「こつは男のくせに可愛い系だからな、かつこつこつを探すか。

「ヤ」のサッカー部ペアー！」

手始めに、相沢一郎と清水淳平に声をかけることにした。

「俺はいくら誘われても、ナンパのようなものはやうんぞ

ようなつていうか、まるつきりナンパです。

「淳平はどうだ？」

「止めとくよ、俺にはこいつがいるからーー。」

もうこいつと、何処からともなくサッカーボールを取り出して抱きしめた。

バカで気持ちが悪い。

諦めよ、

「ねえ、せつしきからなんであつと無視するんだよおー

「副音声は切つておいた氣がするんだが

「何言つてゐの？」

「次は、あつちだー！」

「だから、無視しなこでつてばあー

「こつものよつて真志、……と山下雅史？

異質な組み合せに見えるぞ。

真志は誰とも仲良くするけど、雅史は恐いし恐いから、あまりクラスに馴染んでないよつて見えたんだけどな。

「なんで一緒にいるの？」

つこ、口に出てしまつた。

「あ……？」

「ひいいーつ……」

「さなり睨まれたよな……、殺されそつな氣があるよー?」

「おお、達哉か。普通にしゃべってただけよ……って、怯え過ぎだら

「今、ライオンに追われたシマウマが必死に逃げるのが分かった氣  
がする……」

ライオンに睨まれるよつこちの方が恐いかも……。

「おびえてないで早くしなこと、時間なくなつやつよへ。」

義人は睨まれていなかり言えるんだ!

つて、行く気になつてる?

「ああ、またナンパかお前は。今度は何組だ? それとも先輩?」

「戦いに行くんだつ! んでし組

「俺は行かないけどね」

「なら聞くよー!」

ちよつと期待したじやねえか。

「こ組…か」

なんか、雅史様が食いついた！？

「行きますか、兄貴！」

「黙れ馬鹿」

「すいませんごめんなさい申しません許してください…！」

恐ろしいよこの人！？

“柔道部の大男”寺島雄一と喧嘩したとき、この人圧勝だったりしないんだよな…、末恐ろしい…！

「後で行くかもしれないがな」

「はい？ 今なんかいいましたか？」

ちよいと声が小さくて聞き取れなかつた。

「黙れ下等種族」

「すいません」めんなさい申しませんお許し下さい、ああ僕もつ無理！」

下等種族つて何さ、同じ人間じゃないの！？

もつ逃げ出す」とします！

根っからのびびりなのです！

「恐かつたよお～パパあ～」

「気持ち悪いよお～、近寄らないで」

「くそ、気を取り直して次だ！」

黒川直貴と小林航史の仲良しコンビを田描す。

「直貴、お前しかいないんだ！」

「分かりました」

「よつしゅやーー！」

やはり、確実な所から行くべきだったな。

「直貴…お前あほだろ…」

「航史も来るよな！」

「直貴が行くなら別にいいけど、またナンパか？」

「分かってるじゃん！」

よし、なかなかの戦力をゲットだぜ。

毎回「」のメンバーだつたりするんだけど。

「ほり、あの子だよ、あの子ー。」

「組到着つ！」

そしてお田辺の美女を教える。

「確かに可愛いじゃん」

「うわあ～」

「私だけ見えません…」

みんな納得の美女のようだ。

「あの姿にして、勉学、運動ともに優秀らしいぞー。お前は春  
香さんだそうだ！」

「そんなにす”いんなら彼氏の一人ぐらじーんだろ」

「それが、そんな情報は見つからなかつたのだよー。」

もうこれは、アタックするしかない！

「といふことで義人、逝つて来いーー。いや、行つてーー」

「なんでこきなり押すのー？ ところひとつ何ー？」

こりこり騒いでいるが、しばらくすると諦めたようにため息をつ

いて春香さんの方へ向かっていった。

なんだかんだであいつが一番優秀だなあ。

「本当に行くんだな」

「やつと見えました…、どのお方ですか？」

「わざわざ、どうなる？」

「あ、あのや、君が春香さん？」

「はい。そうですが、何か？」

やはり、いきなり話しかけられたら警戒するよな。

義人ファイトだ!!

「みんなに聞こてるんだけど、配偶者つて話知ってる？」

「…話は知ってるけど、教えるほどのことなんて知らないわよ?」

「单刀直入に、誰が怪しいか教えてほしいんだよね。勘でいいから」

よし、早いかもしれないが、義人の知り合いとしてそろそろ行こうとしよう。

「そう言われても…、あ、雅史君とか疑われてたりしてる?」

「だよね、だよねー！ 僕もそいつ思つんだよー！ 何でかつて、取りあえず田が恐いでしょ、それでもって、田が恐いじゃないー！？」

可愛いだけじゃなくて話も合つんじゃないか！？

「こわなり、つるわあ……」

「えっと、誰ですか？」

「申し送れました。私は黒川直貴です」

「なんでお前が一番前にいるんだよ。俺は航史、よろしくな

「あ、えっと、よろしくお願ひします」

「」の馬鹿！

なんで俺を蹴り倒しますか！？

「あつと、僕は香取義人です」

「わ、私は山下春香です」

「「えーーー！」」

もしやーーー？

「「ひめせえ、下等種族ーー！ てめえら、何やつてんだーー？」

「あ、お兄さん

「「やつぱつー..」」

「だか「り、うるせー..」

「私は用事を思つ出しましたので、先に帰らせていただきますね」

「俺も」

「ほ、僕もー」

「ちよつとまつてー? 僕だけ、胸倉捕まれて[田]浮いてるんだけ  
ビー..?」

「お兄さんー?」

春香さんは優しいなあ…、お兄さんといたり無言でこせかに睨  
んできますよ。

「「」愁傷様です

なんか今までの出来事が瞼の裏にものす「」こ勢いで見えるんですけど…、これつて走馬灯つて奴ですか?

「僕は悪くないよね…?」

「当たり前だ馬鹿、あいつが元凶であつて生け贋だ」

「何言つてんだ…? お前等も逃げんなよ?」

「...?」  
「...!」  
「...」

「あはは…」むんね

「うめんで済むか！――！」

「そういえば、春香さんに彼氏が出来ない理由が分かったね」

「お仕得で俺だけ置いてみんなで逃げたことはまだ許し取らんぞ！」

あの後、雅史お兄さんの拳により一発で意識が飛んだのですが、薄れしていく視界の端にこいつらの逃げる姿が見えたのです。

「 てかさ！？ なんて  
達は平氣なのかな！？」

「ああ、それは春香さんがかばりてくれてある」

「はい！？」

「必死になつてたといひ、めちゃくちや可憐かつたなあ……」

一義人、お前は俺の手で殺したる！！」

俺はそんなの見てないぞ！？

「がはつー。」

暴れよつとしたら、身体中に痛みが…。

「無茶するなつて」

「なんかめぢやくぢや 摘した気分…」

「実際に摘してみよねえ。今度は素直につけて行くから、元気出せよ」

「やつだー。俺の青春はこれからだーー。」

と囁いても、じめじめ安靜にしてなべぢやなあ…。

## 05・市原 達哉（後書き）

「メディア路線で行つたつもうでしたけど、どうだったでしょうか？」

私事ですが、明日まで期末テストだつたりします^ ^；

ということ、大分書くのが遅れていますが、週一回は更新していきたいと思います^ ^

私は井上桜、吹奏楽部をやつてるんだけど、同じクラスに吹奏楽部のメンバーがいないのが残念。

趣味が合わないとなかなか自分からしゃべれなかつたりするからだ。

「そうなの？」

「うん、隣のクラスは席替えの話が出てきたんだよ」

でも、今岡恵里ちゃんは別。

この子は、自分から私の方へ話しかけてくれて助かった。

「私達のクラスは全然よね。出席番号のまま」

「だよねー、隣は来月までにはやるらしいよ」

私達のクラスは今行つたとおり、出席番号順で席が並べられてるまんなの。

詳細にいふと、左前から縦に1番から並んでるの。

6列で、5列までが7人ずつで6列目が5人。

私は窓際の前から6番目で、恵里は7番目。

「先生に聞いてみたら?」

「桜ちゃん聞いてよー」

「私?」

「ううこうの、あんまり気が進まないんだよね。

「うん、というか一緒に行つてみよー」

「今はいなideどね」

「…あとこしますかー」

「そうね

「あ、そういうえば、好きな人とかいないの?」

「えつー!? なんでいきなり?」

一人、頭に浮かんだ人が居たので驚いた。

「いやいや、いきなりも何も、気になるでしょ

「恵里はどうなのよ」

「私はねー…。って、私が言つたら教えてよ? いないとか無しだからね」

「わ、分かつたわよ」

『じまかせないわね…』。

「それで、私は…龍道裕也くんかな」

「ああ、剣道部の？」

確かに、中学校の時からやつて、相当な実力者だつてきいたことがある。

「そう！ 私、一回だけ試合を見に行つたことあつたんだけど、とつてもかつこよかつたんだよ…」

「そういえば、同じ中学校だつけ？」

「いや、違うよ」

あれ？

「違うのに見に行つたの？」

「自分の学校のチームの応援で行つたんだよ。それで、私の好きだつた人を一瞬で倒しちやつたんだよ…」

「そ、そつなんだ」

好きだつた人は、なんか可哀想ね…。

「スパアアツ…！ つて感じ…？」

「元気いつぱいで、つこていけないわ。

「かつこよかつたんだね」

「セウセウー むつ、最高だつたよー。」

「それで、その人つて今どうしてるの?..」

「えー?..」

「いけないことを聞こちやつたかしら?..

「えつと...」

「クラスメイトこころじやん!..」

「セウだつけー?..」

「どうか、よく一緒にクラスになれたわねー。」

「知つてこの学校に入ったの?..」

「たまたま」

「奇跡つてあるのね...」

「運命だよね、セウヒー。」

「え、ええ」

本当にやうなのがもしけないわね……。

「あ、先生來た」

休み時間が終わつてよかつたわ……。

「先生待つてくださいーー！」

たまたま4時間目が担任だった。

なので、恵里は先生が昼食を食べに行く前に呼び止めた。

「ん、どうした今岡？」

私も一応氣になるので一緒にいる。

「席替えつていつするんですか？」

それを聞いて先生は何故か嫌な顔をした。

「あーっと……、しない

「え？」

「「」のクラスは席替えをするなつて校長に言われたんだよ

「なんですか！？」

私はなんとなく会話に入らないで、ただ先生を見ていた。

なんとなく、先生も納得してなによつて見える。

「なんでもって言われてもな…、わるい」

わつこつと先生は行ってしまった。

「席替えは残念ね」

席に戻った私達は、取り合えずお弁当を出して昼食であるレモン

した。

「ホントだよ！ 楽しみにしてたの」「…」

「校長が命令なら仕方ないけどね」

明らかに職権乱用だけど。

「あ、いきなりなんだけど」

「何？」

「桜ちゃんの好きな人って誰なの？」

「ほえ！？」

本当にこきなりね！

変な声を出しちゃつたわ…。

「龍道くんの隣の席になりたかったのになあつて思つてたら、思い出しあやつた」

「や、そつなの」

「ほりはつべきなのかしら。」

「ほり、私が言つたら教えてくれる約束でしょ？」

「やうだつけ？」

「やうだよー、忘れたなんて言わないよな？」

なんか、恵里がニヤニヤしているように見えるナビ、言わなきゃダメよね。

「私の好きな人は野崎くん……かな」

野崎泰明くん……話したことはないけど、一番気になる存在のは確かなのだ。

「えー？ あいつじゃないの？」

そういうこと、私を……いや、私の後を指差した。

「やうだつたのか桜！！」

「なんで聞いてるのよ淳平！ あう、声が大きいわよ」

後に居たのは、同じ中学校だった清水淳平だった。

同じ中学校つて言つたら、森本恵りちゃんもそうだ。

「俺が話す機会でも作ってやるつか？」

「勝手に聞いてしまつてしまない。淳平が遊びに誘おうとこつてな

「えつと、遠藤くんと…」

遠藤くんは田立つ人で話したことはあるけど、この人は誰だっけ  
…。

「お前だけ、名前すら覚えてもらつてねえな…」

「淳平、調子に乗るな。俺は相沢です」

「相沢くんね…、」めんなさい

それにしても、みんなして聞かずかじやない！？

「私もいるよ？」

「井上だっけ？ わ前も一緒に遊ぶか？」

「いやいや、お前やんまだつでもこよ。それより、遠藤くんは野  
崎くんと仲は良いわけ？」

淳平はさうでもこいつて、かわしそう。

「俺は誰とでも話すからね」

確かに私たちも、何回か話したことあるわね。

つて、もしかして…？

「よし、行つてきてー。」

「おひなえー」

「よくないわよー。」

私の叫びも空しく、遠藤くんはいつも通り読書に勤しんでいる野崎くんへと近づいていく。

「どうする気なの？」

「「わあ~。」」

「ちよっとー。」

話したって気持ちもあるし、遠藤くんを信用していいのよね？

「まずは友達になればいいと思つや」

「俺は楽しけりゃなんでもいいやー。」

「やつこつ発言よくないよ」

「ん、そなのがか？」

「Jの人たちは楽しそうでいいわね…。」

「やつこえぱ、遊ぶつてJのメンバーのつもつだつたの?」

「恵も誘つたんだけど、私は勉強します…だつてさ」

「声まね下手つていうか、ただ氣持ち悪かつたよ」

「うめせー」

「本Jのひとだからじょひがないだら」

中間テストがもつすぐだもんね。

「だつてよ、せつかく部活が休みなのに遊ばなこつてビリーフ?..?」

「いや、勉強するために部活がないんでじょひが」

「もつともだ」

「あ、遠藤くん、じうだつた?」

「ややかに騒いでいる間に遠藤くんが帰つてきました。」

「野崎も一緒に遊ぶ」となつた

「「ねーねー」

「そ、そつなのー。」

「ちょっとうれしいかも…、言わないけど…」

「取りあえず、放課後に駅で集合ひで」と

「分かったわ」

「んじゃ、またあとでな」

「それにしても、遠藤くんは一人を連れて行ってしまった。

「それにして、急な

「ちよっと待つて

私が言つ終わる前に、恵里の携帯電話が鳴つた。

ビーワーラーメールのようだ。

「ふむ…、それでなんだっけ?」

「あ、ああ、急な展開になつたわねつて思つたの」

「そうだよねえ

「でも、楽しみ…。

「あれ、ほかのやつは?」

野崎くんは駅で待っている私を見つけると、読んでいた本をしました。

「えっと…、恵里はいきなりいなくなつたやつて、男子の方は分からぬいわ」

学校が終わり、楽しみと不安な気持ちで恵里と駅に来たといつまではよかつたんだけど…。

恵里は、今言つた通りいきなり居なくなつちやつたのだ。

『桜ちゃんごめん、あっちから私を呼ぶ声がするのー。』 つて言つて、走つていつてしまつた。

どんだけよ！

「あ、今メールきた、三人とも遅れるだつて」

「そ、そりなんだ…」

駅を集合場所にした時点で気付くべきだつたわ…。

だつて、学校で集まつて一緒に行けばいいだけだもの…。

その時、今度は私の携帯電話が鳴つた。

「あ、ごめんなさい」

見ると、メールが一度に4件…。

「一つ田は恵里からで、

『いい状況を作つてあげたんだから、明日までに結婚ね』

明日までつて何！？

と云うが、この状況は遠藤くんのせいだしょ。

「一つ田は淳平から、

『暇』

……えつと。

「一つ田は相沢くんかな？」

『相沢です。淳平からメールアドレスを教えてもらいました。登録よろしくお願いします。』

なんで同じタイミングだったのかしら……。

「一つ田は遠藤くんね。」

『今日はスムーズに話せるようになればいいと思つたが。田標は、メール交換つてとこかな』

「そうよね……、これは参考にしよう。」

てつかり、私の周りには助けになつてくれる人が居ないと思つたわ。

「取りあえず、どつか歩いてるか？」

私がメールを見終わると、野崎くんの方から話しかけてくれた。

「は、はい！」

「井上桜さんだよね」

駅近くにある川沿いの静かな散歩道まで来た時、いきなり名前を呼ばれた。

「はい！ あ、桜でいいですよ」

「分かった」

「みんなの名前を覚えてるんですか？」

「全員じゃないけど……」というか、桜さんって良く俺のことを見てませんか？」

「気付いてたの！？」

「えつと……はい」

「……俺つて、恐いですかね？」

私は、その言葉の意味がよく分からなかつた。

「エリエーヌ……？」

と云ふが、見ていたりさせよかつたのかしら……。

## 06・井上 桜（後書き）

ちょっと無理矢理な感じになってしまったへへ；

次は、今岡恵里視点です！

そういうえば、友達がこんなことを呟いてました。

『イケメンになりたい』

『龍道も遅れていいなら来れるだ』

遠藤くんからのメール。

「ふむ…、それでなんだっけ?」

私は、恋する乙女今岡恵里です

…気持ち悪いとか言わないで。

「あ、ああ、急な展開になつたわねって思つたの

やつ、今から私と龍道くんの恋物語が始まることです!」

「そうだよねえ」

想像するだけで幸せ…。

「あ、やつこえば、辻斬り事件があつたらしいよ…」

恋焦がれているのもいいけど、噂の話も大切です。

「今の話は終わりー?」

「それは放課後の話でしょ」

何を言つてゐんでしょう?

「・・・そう、それでどんな事件なの？」

「うんとね、狙われたのはなんと隣のクラスの男子さん！」

名前は別に必要ないと思つよ。

えつと…、もう登場しないといつが、登場すらしないし…。

「あら、かわいい！」

「うんうん、それだけでいいよ。でね！ どいつも犯行かといいま  
すと、後ろから鈍器でガンッって感じ…」

「じゃあ、犯人の顔とかは見てないの？」

「一応見たらしげど、覆面さんだったらしこよー。そして被害者  
は、病院送り」

「わー…、凶器といつか、犯行に使つたのは？」

「それはねえ…、タンタカターッ」

かつこいに効果音を軽やかに言ひて、鞄の横に置いておいたもの  
を取つた。

「木刀ね…、ビームから持つてきたのー？」

「龍道のに決まつてゐるじゃん。いらなくなつたのだよ」

「決まつてるの…」

「深く考えたら負けだからね

「あ、冗談だよ。なんで、そんなに本気にしてるの?」

あまりにも桜ちゃんが寂しい顔で見るから、つい本音のことを言ったよ。

「わうよね。私、疑つたりしてないわー！」

「何その反応! ちょっと待つてよ、流石にストーカーみたいなことはしないよ?」

シラックだよ・・・、友達に変な顔で見られてたよ…。

「わ、分かってるわよー。『気にし』」

と、その時にチャイムがなった。

「取りあえず、放課後頑張りましょー!」

「わうねえ…」

そういって前を桜ちゃんは前を向いた。

はてさて、次の授業は教室でいいんだよね。

「わくわく

待ちわびていた放課後になつてしまひました！

「なんで、恵里がわくわくなの？」

わういえば、桜ちゃんに言つてなかつたな。

「実はね…。いいや

わざわざわざわなくていいか。

「何よ、それ」

「いいからいいから、早く行きましょー！」

先に行つててつて、遠藤君からメールきたんだからね。

「駅の近くよね

早速着こちやこました！

「うん、今いらへんでいこと想つよ。」

「なんで、あなたが浮かれてるの？」

「だから、なんでもないつて！」

どうでもこいけど、隠しておひ。

「わーい、ひょっと氣になら」があるんだけば

「なあに?」

おつと、携帯電話がなつてゐる。

誰からかな?

「昼休みに話していた辻斬り事件の犯人って

お、遠藤君から、なになに?」

『今岡は一里、俺達と合流しようぜ。川沿いの方にいるからや』

『桜ちやんめん、あつから私を呼ぶ声がするのー。』

恋愛とこつなの青春が私を呼んでくるわ

「聞こえなじよー?」

私は、そそくさと川沿いに向かって走り出しました。

「あ、頑張つてね」

「本当にやつのー?」

「大丈夫だつて!」

心配ないでしょ、あんなに可愛いんだから。

「はあ……はあ……」

川沿いに行くと、遠藤君と相沢君、清水君がいた。

「息が切れまくつてゐるじやんー。島崎先生、じやね？」

「うるさい……こつ。」

「それよつも、野崎がそろそろ合流してくるはずだから、メールでも送つてやるわ。」

「せつま、遅れるつてメールしたんだよな。とこつか、俺は井上さんのメアドをしらな。」

「うう……、疲れてしちゃべれない。」

「俺が教えてやるよ。とこつか、遊ばないの？」

「俺等は遊ばないけど、楽しむのよ。」

「意味が分からな。」

「はあ……、それより、龍道くんはー。」

「ああ、川沿いで待ち合わせだけば、もつひとい遅れるみたい。俺等はメールを送つたら解散するよ。」

「よつとビキニしてきたー！」

「きた。教えてくれてありがとな」

「ほーほーい」

相沢君は、清水君に桜ちゃんのメアドを教えてもらつたようだ。

「それじゃ、みんなでメールを送つてみますか

「俺は初めて送るからなあ……」

「送るも何も……、これでいいや」

「あ、私もか

「んな感じのメールでいいかな。

「「そーしんー。」」

「つて、何で声が重なるのー?」

「今は重なるとこがじやないよつな……?」

「いいじゃん別に

「やつこつ言い方はないだろ」

「俺等はもう行くぞ。あ、井上の方は誰が行く?」

「ああ、そんな話してたな。俺は行かないけどよ

「だから楽しむのね。よし、俺が井上だ！」

なんの話だね!」

「よし、んじゃ行きますか

「ありがとね!」

三人とも歩き出したので、その途中にお礼を言つて立つた。

「ああ」

よし…、ここからは一人で頑張りなへりやー。

「それにしても、緊張するよお…」

「えつと、今何を…?」

「はこひつーー!」

「さなり後ろから声がーー?」

と思つたら、龍道君だつた。

「えつと、驚かしちやつたかな? ごめん

「そ、そんなことないですー!」

どうどう来たんだ！

つて言つても、五分も経つてなかつたり……関係ないわね。

「他人たちは？　俺は遠藤に誘われたんだけど……」

「分かりませんわ。ど、どうしたんでしううね？」

「ちょっと敬語になつてますわーー？」

「お、メールだ」

「あ、私ですわー！」

またもや遠藤君からだわ。

『落ち着けよーー！　なんかあつたら助言してあげますからーー。』

『いかで見てこようつなタイミングね。』

でも、そりよね！

落ち着くのよ私……。

「三人とも遅れるらしげだ。あと、聞いてるか分からぬけど、寺島は来れなくなつた」

「寺島くんつて、柔道部の人でしたっけ？」

そういえば、一人でいるところを良く見ていく気がする。

「なんか、メールで『ごめん、行けなくなつた。だから、一人で行け!』ってきたんだよな」

「何があったんだよ?」

「ちょっと気になる...」

「電話が繋がらないから分からん。それより、他にいなんならしそうがないな」

「え?」

「二人でどうかに行こうぜ!」

「これは『テート』といふ奴では!?」

「はいっ!」

と、進行方向の先の方に桜ちゃんと野崎君が見えた。

「あつちに行きましょう!」

「え? あ、分かった」

「ソリで一緒になつちゃつたら、一人きつじやなくなつちやう!」

「ちよ、ちよっと走りましょう!」

「え？ どうし？」

それは嫌だ！

「いいからっ！」

「ふう……」

「ここまでくればいいでしょ……。

「手を離してもらつてもいいかな……」

そう言われて握っている手を上げると、龍道君の手も上に上がった。

「あっ、ごめんなさい！」

「いや、誤りなくていいよ」

私つて、なんて大胆なの！？

「結構走ったように思うけど、大丈夫？」

ああ、龍道君の笑顔が眩しいわ……。

いきなりだけど、これは告白のチャンスなの！？

「大丈夫です！」

卷之三

「あそこの公園まで行つて、休もうか」

そう言って、龍道君が指差した先には小さな公園があつた。

「ちよつと、いじめんなさい。」

公園のベンチに座つたところで、携帯電話がなつた。

確かにチャンスかもしれない！ 頑張るんだ！』

遠藤君からだつたけど……、心も読めるのかな。

「俺、する」とあつたんだ！ そろそろ帰らなきやー。」

え！？

もうチャンスは今だけなの！？

「… 一つだけ言いたい」とがあるんだけどいい?」

とにかく話してしまった！

も、ついでしかないのね…。

「...?」

私は大きく深呼吸することにした。

うん、少しだけ落ち着いたかも。

「龍道君のことが、前から好きでした！」

ありきたりな言葉だけど、私にはとっても大切な言葉。

私の気持ちよ、届いて！－

「俺たち行けなかつたけど、昨日はびひつだつた？」

俺は遠藤真志、誰にでも優しく、仲良くする「リリコニケーション」能力抜群の天才だ！

「ちよつと調子に乗りすぎました。

「なぜか、井上と一人だつた」

井上と野崎のその後が気になつたので、次の日の朝、野崎の方に聞いてみることにした。

「たまたまだぞ、俺はなんもしていない！」

「…そつか」

とか言いつつ、聞いたのはもつ先週の話なんだけど、あの日の出来事を回想してみよう。

「取りあえず、静かな所を求めて川沿いの散歩道まで歩いて行って

「

「…俺つて、恐いですかね？」

なんとなく、俺は井上に尋ねていた。

「じいちゃん」と……？

数秒の沈黙の後、不思議そうに尋ね帰ってしまった。

「今まで、苛めてしてくる奴と相手にしなくなつた奴ばかりだったから」

俺はなんでこんなにじやべつてこるのだろう、じいちゃん性格じゃない気がするんだけど。

「じいちゃんに合氣道をずっと習っているから、苛めてくるような奴もいすれはしなくなる。最終的には、無口な俺は友達ができなかつたんだよ」

一秒ほど待つて、何も言わなかつたので続けた。

特に悲しい訳でもなんでもなく当たり前だったことを、俺はなんでわざわざ他人に言つているんだが。ひ

「……なんでもない。気にしないでくれ

なんか、ばかばかしくなつたし、つまらない話だからやめことじよう。

「野崎君は悪くないと思つよ

少し戸惑つた。

井上が俺の顔を見つめていたからだ。

「そ、そつか」

基本的に他人に相手にされたくないと思つてゐるだけに、見られることに慣れていない。

だから、見られていたことにも気付いたのかもしれない。

「うん…、私が友達になるよ」

「は？ あ…、わつ」

そんな答えを望んでいた訳でもなく、ありえないよつて思えた答えだったので、自分らしさからぬ声を出した気がする…。

「友達なんだから、メアド交換しよ?」

なんだろう、この展開？

意味が分からぬ。

「あ、きたきた。ありがとね」

とか言いつつ、携帯電話を取り出したりしたんだけどね。

「……」

なんとなく、見られていた分、見つめてみることとした。

「な、何かな？ …顔になにかついてる？」

「ちよつと、観察」

「えつ？」

初めて「冗談を言つてみたんだけど、通じなかつたよつだ。

会話つて難しい。

「熱でもある？ 顔が赤くなつてゐるよ」

「いや、違つ！ 大丈夫よ！」

「そつか」

「そのあとも、少し話しながら歩いてただけだよ」

ほむほむ、いい感じなんじやないか？

「井上のことは…、好きか？」

「ああ」

「マジで…？」

「いい友達が出来てよかつた」

「……そつか」

野崎が他人と話しているところも見たことないし、友達になれただけでも充分前進したつてことでいいよな。

「せういえば、寺島は何があつたんだろう」

「またな」

その話題はよろしくないのだよー。

「……？」

寺島が腕に包帯を巻いて登校してきたのに、俺が関係しているはずがある訳無いじゃないか！

「遠藤……、お前もいなかつたか？」

なんで寺島は、何の迷いも無く俺のところに来たんだろうねえ……。

「なんの話？」

「いや、なんでもない……。そりだよな」

すいません、本当はこました。

ビービいたかとこうと、また回想になつてしまひましたねえ。

「一緒にいたから、怪しまれないようと一緒に誘つてしまつたけど、

“やつあるのか…”

今岡のために龍道を誘ったのはここだけれど、赤島も一緒に行くことになってしまった。

「よし、エトに頼むとしよう」

あいつならどうにかしてくれるだろ？

「放課後、時間空いてる？」

「んだよ、面倒なのは嫌いだぞ」

たぐ、そんなことを言つていいのかね。

「弱みつてのは、いつでも使えるよ？ してあるんだぞ？」

といつて、俺は自分の携帯電話の画面を見せた。

「…踏み潰していいか？」

どんなものが映つっていたかといいますと、エトの待受け画像ですね。

そこには彼女の写真とかじゃなく…妹の写真。

「マザ【ン】って知ってる？」

「俺にも我慢の限界があるって知ってるか？」

「ちよつと調子に乗りました。すいません」

「たく…、んで、何してほしいわけ？」

「寺島の捕獲」

「あこや」

「元壁だよな。」

「…今日は美保か？」

「これはさて、なんのことを言っているんでしょうか？」

なんてね。

「そうだよ。それにしても、良く分かるな。見た目とか全く変わりないぞ？」

「なんとなく違うだろ。雰囲気もな」

「流石、最初に気付いただけありますね。一応秘密のこと忘れるなよ?」

「分かつてゐる」

志保が美保にバスケをやりしあげるために入れ替わつたりして  
るんですよね。

この話はまた後で。

「んじゃ、また」

よしよし、状況は作ってあげたし、あとは高みの見物をして楽し  
みますか。

といひことで、俺は無罪です。

じゃなくて、山下がどうやるのか気になつて寺島を捕獲する場面  
に居たんだよね。

一応、隠れてたんだけどな……。

「恵里、本当に大丈夫?」

「駄目、死にそう……、というか死にたい」

あ、今岡の方はどうなつたか言つてなかつた。

「桜ちゃんはいいよね。友達つていうか、もつ彼女じやん!」

「だから、そこまで行つてないつて」

とかいいつつ、幸せそうにしている井上に対し、今岡の落ち込  
み具合を見れば……、どうなつたか分かるだろ。

かわいそう……。

『悪い、俺は剣道に生きるから』

なんの躊躇もなく、あつさつと龍道にせうこわれぢやつたんだもん。

なんだよ、気持ち悪い。

確かに、恋愛したら気の乱れとかそんな感じの」とかあるのかもしれないけどね。

「私……、今だったら飛べない氣がするから、飛び降りていいく？」

「ツツ」「!!」じろ満載な事を書いて飛び降りようとしたるなど、あれはダメージが大きすぎだろ。

人生は、思い通りには行かないもんだね。

「つて、誰か止めようよー。」

お、相沢はいい奴だな。

よくなつうなので、一話に分けることにしました。

題名の書き方、他にいいあるかな？。

『今宵、月はどこを窓からすの？』

「うるさいー。」

おつと、携帯電話のアラームに對して失礼だな。

でも、朝っぱらから耳元で質問されても、まともに答えられないでしょ？

「よし、今日も頑張りますか」

いつも通り、太陽より早起きです。

現在の時刻、3時半。

あ、今更だけど、ポルノ イイの曲ね。

ポルノイイって読まないでね、隠してる意味がないから。

んで、俺は今から新聞配達に行ってまいります。

それではっ！

「起きてって、じゃまだからー。」

「うう……、了解」

今日は美保かな？

若干優しい……気がする。

今身体を搖さぶられてるんだけど、その力加減かな。

毎日の日課で、教室に一番乗りに来では板垣志保の席で永眠。

いや、起きるけどね？

「ほり、早く！」

「……やつぱり優しくない」

「喧嘩売つてるんなら、買つわよ？」

「すいません！」

この前見たく、椅子は勘弁してほしいしね。

別人だけどぞ。

「うちはのクラスにも大分慣れたんじゃないか？」

「あれ？ やつぱり分かっちゃうの？」

「俺以外にも分かってる奴はいるよ、山下とか米倉な」

米倉圭吾、友達思いのバスケ部だ。

「圭吾は前から知り合いだけど、山下も？ 私達って思つてたのよつ似てないのか？」

「それはないから大丈夫だ。気付く奴がおかしいだけ

「他にも、栗原真央とかもだな。

そういうえば、なぜか清水淳平も気付いてたっぽいな。

あいつも地味にすげいのか？

「あ、今更だけど、アドレス教えてもらつてなくない？」

「やついえば、そか

えつと、携帯電話はどこにやつたけな……。

「あれ？」

「どうした？」

「……ない！？」

ポケットに普段入れとくのと、内ポケットにもない

「お前、またケイタイなくしたのかよ？」

「お前、またケイタイなくしたのかよ？」

「いきなり、現れるんじゃない、淳平」

「こいつは無視だ、俺の携帯電話の方が大切！」

「トイシ

「落ちたよ……、ケイタイ」

「だぞ……っ！ お前が天然キャラでも萌えないぞ？」

「いぬわーー」

そういうえば、今日は珍しくアラームをセットして、机の上に置いたんだった……。

「……俺から送信するな」

「あいよ」

「……またって、なんだ？」

「ん？ ケイタイの話か、別にいいだろ」

「俺が見つけてやつたんだよ。廊下に落ちてたケイタイをね。昨日の……昼休みだっけか？ まじ、天然キャラとか」

「何回もいっな！ てか、そんな話どうだつてよくね？」

話題として微妙なもんを持ち出せんでよろしい。

ちょっと恥ずかしいから。

と、その時、学校にお決まりの音が響いた。

「お、チャイムなつたし、そろそろ席に座りつけ。真志」

「そりだな」

「以上だ……。と、その前に、配偶者のヒントだそりだ」

校長から聞いたのか、担任の橋口先生は自然と配偶者の話を出した。

そういえば、今日から6月だつたな。

「えーと、『“配偶者”』は『

その時、誰かの携帯電話がなつた。

音の鳴つた方向……、左斜め後ろを見ると、朝倉加奈がすいません  
と言ひながら携帯電話を取り出していた。

「次鳴らしたら、取り上げるからな

「はい、すいません……」

と、俺の携帯電話が振動した。

マナーモードにしててよかつた……、今のタイミングで携帯電話がなつたら洒落にならない気がする。

「えっと、それで」

またもや携帯電話が鳴った。

「というか、一人じゃない。」

「3、4人いる……？」

「お前等、いい加減にしろ！」

「「すいません！」」

俺の携帯電話が振動したのは、メールのようだ。

状況がおかしい気がしたので、確認することにした。

『“配偶者”は文化祭に参加する』

「はい……？」

「これはなんなんだろ、ヒントとしてはふざけてるだろ。」

「たぐつ……、ヒントをいつぞやー、『“配偶者”は文化祭に参加する』だ。HRを終わりにする」

「「……」」

「どうしたみんな、アホみたく口が開いてるぞ」

えーと……、マジですか？

俺の知らない人からのメールだしな。

アドレスは『a - s u s p i c i o u s - p e r s o n @ - - - - - . n e . j p』。

a s u s p i c i o u s p e r s o n . 怪しい者。

自分で言つな！

つて、突つ込んだら負けなのか？

てか……、ヒントが分かるつてことは配偶者からのメール！？

「次の授業に遅れるなよ。体育だろ？」

そういうて、先生は出て行つた。

このメールの送り主は、なんで俺の携帯のアドレスを知っているんだ？

俺の携帯電話が無くなつたのも体育の時間。

忘れたのか落としたのか、その時は野崎と先に教室を出たから分からぬ。

淳平が拾つ前に誰かに見られたのか……？

他人が俺のアドレスを教えてしまったのだとしたら、全然分からないけどな。

「由香里もメール来たの？」

後ろの席で話し声がする。

「美咲も？ ていうか、美咲はケイタイ鳴っちゃってたか」

「ホントびっくりしたよ、取り上げられなくてよかったです……」

「あのや、メールつてこれ？」

気になつたので、俺に来たメールを見せる。

「遠藤君も、来てたんだ」

「見えなかつた？」  
「いつはすぐケイタイ開いてたよ。すぐ後ろだから丸見え」

えつと、大塚由香里と尾前美咲だな。

「のメールはクラスメイト全員に送られたのか？」

「なんでこいつは俺のアドレス知つてるんだろう……」

「いや、遠藤のアドレスはクラスのみんなが知つてゐるでしょ。こいつがクラスメイトなら、当たり前ね」

アーニーは、もうでした。

吉井絹子つていう日本人的な綺麗さを持つてる奴のアドレスすら  
知ってるしな。

なんていふんだるう……、浴衣着るならこの人にて感じ?

このめん、またたくもして意味不明だね。

性格は、冷たい感じがしちゃうかな……

『あなたも私を疑ってるんでしょ？……みんな互いに疑いあってるなんてバカみたい』

配偶者の話を出したら、「なん」と言われちゃいましたよ。

悪い子じゃないけど、きついから友達少ないだろうね……。

ちよつと心配。

「それより、なんで私達のアドレスを知ってるかよね……」

「だよねえ……。 そういうえば、 真央ちゃんが一回ケイタイなくしちやつたよね？」

「あつたあつた。教室にあつたんだよね。その時に見られちゃつたのかな……」「

はしゃげ、他の奴もあの子にアドレス教えてないし……もしかし

てとかつて話てるけど、俺はそろそろ着替えないと体育に間に合わなくなつちゃうから会話から離脱するとしよう。

「……こきなり、脱がれてもお前に萌えとか

「ひめやこだまつとけ、いい加減にしつこ。お前はどこから現れるんだー。」

「や、やこまで囁ひなよー。一緒に行こうと思つただけなの」

「…

淳平が泣いたふりしている方が、萌えないしだ気持ち悪いだ。

とこつが、萌えをいまこち理解していなこから「メンストリーナビ」。

「真志君、ひょっと聞いていいかい？」

聞き覚えのある幼い感じの声が俺を呼んでいる。

「ん? 誰じや?」

後ろを振り向くと志野大輝つていうクラスメイトがいた。

俺調べによると、中学の時はめちゃくちゃ部活を頑張つてたらしくけど、今は帰宅部りしき。

何部だつたんだっけなあ……、情報を集めすぐこそこがらがつている今日この頃です。

「志野か、お前も一緒に行こうぜー。」

「暑苦しいぞ……。大輝はそれで何が聞きたいの？」

「こや、一緒に行きましちうよ。待ちますから……、その時でいいでしょ、うへ。」

「了解、急ぎます」

あ、さつきのメールアドレス登録しどうと。

“怪しい者”つと。

「今は部活やつてになつてありますナビ、何か運動部とかやつてなかつたんですか?」

「……」これは中学の時から帰宅部だつてよ。運動神経いいんだから、やればいいのに

「俺にもいろいろあるんだよ。」  
「ううん、面倒だし。」  
「ううん、面倒だし。」

正直に言うと結構貧しい家なので、部活じゃなく、バイトしないと学校行けないのよ。

二二、サム

我が家のお頭はお母さんで、お父さんはいないんですね。

「確かに」さつですね

「おひよ。親父からいろいろ習つてたからな

空手、合氣道、柔道、剣道などなどなど……、親父はなんでもで  
きて最強でしたから。

問題は趣味ですねー、賭け事は良く出来てるね。

どつぱりはまりやがつてですよ。

まあ、おかげで身体はある程度鍛えてあるつて事で。

「やつぱりですか……。私は小柄ですか、強くなるのは難しいで  
すよね……」

「強くならなくたつて、楽しい人間の方がモテるんだぞ！　俺のよ  
うに！」

「そんな話してないから……、大輝だつて、強くなつと思えはな  
れるぞ。大変だけどなー」

てか、俺の場合、目標あつて強くなつたけど、結局目標を達成し  
てないしな……どつでもいいけど。

「いえ、大丈夫です。問題ないですから

「はい？」

「着きましたよ。それでは、ありがとうございました」

そういうと、大輝は先に走つていつてしまつた。

「……なんなんだつたんだらうな。あいつ」

「モテたかつたんだらうよ。俺みたいに」

「こいつに聞いた俺がばかだつたな。

「ほに？ ……メールか」

時間は流れ、学校が終わつてベットでソーランじこると携帯電話がなつた。

面倒だけど、メールを開いてみる。

『“配偶者”は女子の中にいる』

やはりというか、“怪しい者”からのメールだつた。

- - - 遠藤 真志 (後) (後書き)

言つてたことが違つちやつてたので修正しました^ ^ ;

年末までバイトで忙しいので、次の更新は来年になりそうですね……。

「お先に失礼します」

よし、アルバイト終了。

あ、ファミリーレストランで働いてます。

「はいはーい、ツカリンまつたねー」

「変なあだ名やめてつてば、いつも変わってるしー。」

アルバイトで仲良くなつた友達に突つ込みつつ、携帯電話を開いた。

「そんなことをないつて、ツカツカー！ それより、今度の日曜とかまたカラオケ行かない？」

あるバイト中は、マナーモードなので気付かなかつたけが、メールが来ているようだ。

「今月はお金ないのよ、また今度といつこと。今度こそ、お先に失礼します」

そういうて、室内を出た。

登録していないメールアドレスだけど、見覚えてがあるような…。

…。

『“配偶者”は女子の中にいる』

メールの内容を見て朝の出来事を思い出した。

多分、配偶者からのメールで間違いない……けど、このメールの内容の信憑性は薄いわね。

「でも、当たってみよう」と

女子を中心て、毎日調べて見ましょう

同性の相手ともあんまり会話していなかつた野崎泰明君が、井上桜ちゃんと話すようになったのも気になるし。

佐藤真子ちゃんが昼休みに教室に全くいないのも気になるしね。

他にも、こんなあるし、たまには自分から配偶者探しに動いてみようつと。

（取りあえず、確実に違つのが市原達哉君と寺島雄一君だけなのよね）

今までのヒントは、『配偶者は△組の中にいる』

『配偶者は学校を休まない』

そして、今日の『配偶者は文化祭に参加する』……。

わるのは外しておいて、寺島雄一君は今、学校で噂になつている“辻斬り”事件に巻き込まれてしまつたのだ。

山下雅史君に殴られたり、蹴られたりしても頑張って学校に来てたのに、辻斬りの件で到頭学校を休んでしまった。

辻斬り事件……、このことからも被害者の怪我は本当にひどいことが分かると思ひ。

「あ、噂をすれば……つて、山下君か」

今歩いているのは、街灯の明かりしかない住宅街の道。

人気の少なく、正直、意識すると不気味で居心地が悪い。

山下君はまだこちりに気付いていないようだ。

右手に小さなレジ袋を持ち、左手で煙草を吸っていた。

隣には、かわいらしい女性……彼女だろうか？

不良っぽい（煙草吸つてるし）山下君とは正反対に、隣に並んでいる女性は真面目そうな子に見える。

見た目で決め付けちゃいけないかもしねいけど、明らかにぐれちゃっているようには見えないということね。

何か話しているようすで、はつきりと山下君と分かる距離にきても、こちらに気付いていない。

と、山下君の後ろに人影が見えた。

「……ん？ 後ろ……ツ！－！」

私の声とほぼ同時に人影は長い棒を山下君に向かつて振り下ろした。

「……ツ！－？」

私の声に山下君は素早く反応して、後ろに振り向きつつ何かを持つている手をはじいた！

「な……ツ！－？」

人影は一瞬戸惑つたが、一歩下がりすぐに持っていたもの 木刀を握り直した。

「春ちゃん 春香、下がつてろ……」

街灯に照らされていることと、自分自身が落ち着いてきたことにより人影の姿が見えた。

といつても、顔を布で隠しているために正体は分からぬ。

分かることは、私達の制服である」と足が長くて、身長が私ぐらいいつてことぐらい。

多分、こいつが辻斬り事件の犯人だろ？

「三人では無理だな……」

犯人が何かを呟いたかと思つた瞬間、踏み込んで再び山下君

に木刀を下ろやうとした。

「そんなんで……俺に勝つとゆづなよ」

「なんてね」

と思ひきや、何かを投げてきた。

近距離で投げられたため、山下君は避けられず、その何かが当たりはじけた。

「ツ……、ガソリンか？」

そう言われて、破裂とともに現れたにおいで氣付く。

「それじゃ、またね」

そういって、犯人はマッチを投げて走り出して行った。

「……ツ！」

「え……ツ？」

私の反応は遅れてしまった。

脳裏に最悪のシチュエーションが頭に浮かんだ。

山下君が死んじゃう？

「手……大丈夫？」

「わざわざ手当をしてくださったまじで、ありがとうございます」

あの瞬間、落ちていくマッチを山下君の彼女……じゃなかつた、妹君が取つたのだ。

……正直、危なかつた。

一瞬の出来事で、私には何も出来なかつたもの。

「わざわざ手当してしゃがつて、俺がやるつていつただらうが

「ガソリン被つてて良く平氣ね。早くシャワーに浴びてきなさいな

結果から言つと、なぜか私は山下君の家にいる。

話を聞くと、両親は共働きで家には誰もいないといつことなので、妹君の手当をしてあげることにしたのだ。

その時に、この女性が山下春香ちゃん、山下雅史の妹といつことを知つたのだ。

「あ、山下痴じや分かりづらいから、雅史つて呼ぶね」

「調子に乗るなよ……？」

「そんなこと言つちや駄目よ。由香里さんがいなかつたら、もつと大変なことになつてたかもしれないのよ？」

「…………ません、…………シャワー浴びてくるからな！」

妹君には弱いなあ…………、いきなり変な奴に襲われても、微塵もうろたえなかつたのにね。

「それにしても、雅史つて妹思いなのね」

山下君改め、雅史が見えなくなつたのを確認して妹君に話しかけた。

「はい！ 本当に優しくしてくれるんですけどお兄さん」

「うううん、いこ」とだね。私には中一の弟がいるけど、生意氣でしょうがないもん

お姉さんの私に対してため口ですから。

ところが、命令口調ですか。

「…………でも、私がいると彼女さんもくへに作れないんじゃないかつて思つことがあるんです」

「ん？」

妹君の顔が少し曇つた。

「こつも私に付き合つてくれているので、遊ぶ時間も無いだらつ

…………

「気にななくていいと思つよ。雅史が好きでやつてるんだらうからね」

本の一時間前にまともに話したばかりだけど、それだけでも妹君のことを大切に思つてゐることが分かつた。

「でも……」

「うだうだ言わないの。雅史に好きな人が出来たりなんかしたら、その時に考えればいいのよ。今を楽しまないと損よ?」

確かに、いつまでもずっと傍にいられるとは思えない。

だから「ん、今を乐しく過へ」ってほしこつて思つた。

「……やつですねー」

その言葉と共に、妹君の今日一番の幸せやつた笑顔を見せた。

「よし、まずはお兄さんのシャワーを覗きに行きましょうか

「え……ー?」

「流石に冗談よ?」

「の子、面白いわ。

「……こつまでくるんだ、お前

やつと戻ってきた雅史の一顎皿がこれだ。

「あ、やつと出でたわね」

「由香里さん、ガソリン被つちゃったんだし、仕方ないわよ」

「それもやつね、春香……つて、それより、タオル巻いてるだけ女性の前に出でてくるのさじうかと思つわよ?」

「それより、お前と春香、仲良くなつてしまじやないか……?」

「あははー、」のまま、止まつてこいつかな?」

「本当にですか? 私は大歓迎です!」

「俺は大迷惑だぞ、おー」

「それより、早く着替えてきなさいってのー!」

正直、クラスの男子の裸体見て平然としているやつ、私だけ鈍感じじゃないのよ。

「やつだよ。お兄さん、礼儀がなつてないよ」

「……分かつたよ、たくシ」

ふと時間を確認してみると、12時を回っていた。

「つて、やつこんな時間!?」

アルバイトが終わってからだつたし、よくよく考えればこのべりいの時間になつてておかしくないけど、家に連絡してないから、帰つたら起こられるかも！？

「由香里さん、急に慌ててどうしたんですか？」

「ちよつと、電話するねー。」

携帯電話を取り出して、家に連絡の電話をしようとするボタンを押す。

「あ、由香里さん！？」

『「あ、由香里！？ お、遅いから夕飯、先に食べちゃつたから、残りもので我慢してねー。』』

「……？」

怒りがれなかつたのはつれしいけど、なんか様子がおかしい……。

『「あ、気をつけて帰つてくるのよ？ 時間も時間だからね。それじゃ

や

「……夕飯つて何？」

『「えー？」』

「夕飯のメニューはー？」

『「……寿司よ」』

やつぱりーー！

我が家では代々（多分）、いいものを食べるとされ、出来るだけ一人分の分け前を多くしようとする性格なのだ！

「それで、この時間でも私に怒らないのねーー！」

『や、やつよーー！こんな時間まで何してるのよーー……遅く帰つてきなさい』

「おかしくない！？ もしかして、寿司だけじゃないでしょーー！？」

『……一人で寿司を食べてたら、お父さんが帰つてきて、焼肉にしきつて…ね？』

最初は弟と二人で食べてたのね……。

「あんたら、よくそんなに食べられたなー！」

『……デザートは別腹つてこつじやない？』

「デザートじゃないだろーー！？」

『奮発してケーキまで用意しちゃった……みたいな？』

「誕生日よつ豪華じやんーー！ 確実に、食こすぞじやんーー！」

前々から、自分の家族は変だと思つてたけど、このままでだとは思わなかつた……。

『や、それじゃ、早く』

『おぬれど、メロンも早く切つてよー。』

「は……？」

『……早く帰つて、しなくてもいいわよ』

ナツコって、向ひから電話が切られてしまつた。

「お前、声でかすがだべ。ボリュームトボンや」

電話が切れてしまふに、着替え終わつた雅史が帰つてきた。

「ハナハナヒー。」

「……んだと?」

「今の電話聞こえてたけど、由香里ちゃん落ち着いてー。」

「……いい加減帰れよな」

流石に雅史もイライラし始めてこるのが分かつた。

「……春ちゃん」

「何かな?」

「ちよつ……！」

「せひ、雅史も普段通り、そつ呼べばいいんじやないかな?」

自分でも分かぬぐらこ、憎たらしい笑顔を雅史に向けた。

正直、ハツラツたりです。

「お、俺がそんな呼び方あるかよーーー。」

「わづなの春香?」

「えつと……、由香里ひととおつ前までは、今日も春ひやんつて呼んでくれてこました」

「……寝る」

「わづ、雅史の顔がめぢやくぢや赤くなつてゐる。

こんなのが見れるなんて、今日になれる前は思わなかつたよー。

「変な顔……あはははーー。」

「帰れーー。」

「夕飯食べたらね」

「そんなの聞いて

「せつかくなので一緒にじつわつて、話してたんですね」

「今聞いたからこいよね

……雅史つて、思つてたほど悪い奴じゃないかも。

呼び捨てしてて、すぐ違和感あるナビねー。

## 09・大塚 由香里（前）（後書き）

更新が遅れてすいませんでした^ ^ ;

3日になる前に更新したかったのに間に合わなかつたし...orz

そしてまたまた、前編、後編に別れてしましました^ ^ ;

一人の話を一話にまとめるのは無理ですね^ ^ ;

これからはほんとんび、こんな形になっちゃうかもしだせませんが、ご了承下さい^ ^ ^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5657f/>

---

配偶者は誰？

2010年10月9日16時42分発行